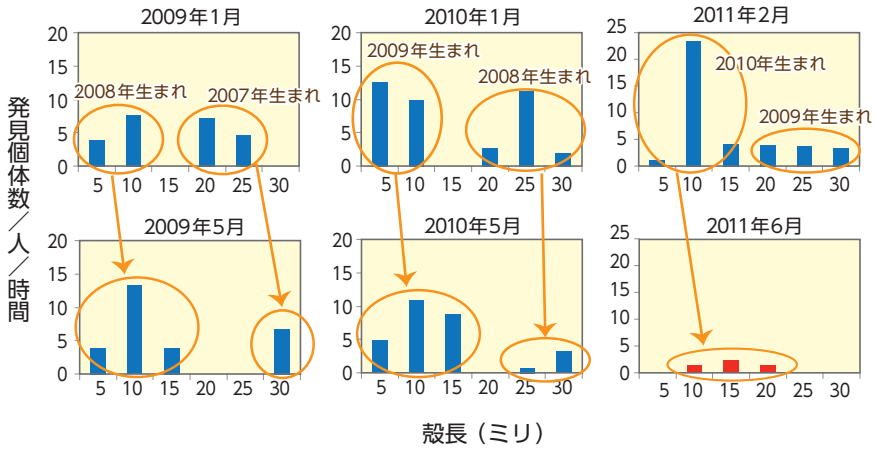
岩礁域の水産生物への影響
～三陸沿岸のエゾアワビ稚貝の減少を確認～

三陸沿岸ではエゾアワビは重要な水産資源ですが、これまで津波後にはエゾアワビの漁獲量が減少し、回復するまで複数年かかる事例が知られています。今回の津波は、これまでとは桁違いに大きな規模だったので、エゾアワビにも大きな被害を与えたものと心配されました。そこで、アワビ資源への影響を確認するため、宮城県牡鹿半島で2011年6月7～8日にエゾアワビ親貝の生息密度（一定の面積に生息する個体数）、エゾアワビ稚貝（殻の大きさが30ミリ以下の0歳と1歳貝）の密度指数（1人1時間当たりの発見個体数）を潜水調査により調べ、津波発生前の結果と比較しました。

親貝の生息密度は津波前と比較して半分以下に減っていました。付着力の弱い稚貝に対する被害はもっと深刻で、10年に生まれた0歳貝（2010年生まれ）の密度指数は11年2月9日と比較して約9割減少しました。この調査場所では09年から0～1歳貝の密度指数を継続して調査していますが、今回の調査ではこれまでにない著しい低下がみられました（図、写真）。

同様の調査を三陸沿岸各地で行っていますが、親貝に対する津波の影響は場所によって異なることが明らかになりました。例えば、岩手県大槌湾では津波前と比較して生息密度には大きな変化がありませんでした。しかし、稚貝は各地で共通して津波後に大きく減少していることが明らかとなりました。このことから、稚貝が成長して漁獲されるようになる3～4年後のアワビ資源への影響が心配されます。

今後も継続してアワビの生息状況を調査してこの後の資源量の推移を確認するとともに、漁業を続けながら資源量を維持していく管理方策などについても検討していきます。



図．エゾアワビ0歳貝、1歳貝の密度指数の変化

写真．約1時間の潜水調査で発見されたエゾアワビ稚貝
（左：津波前2011年2月9日、右：津波後2011年6月9日）